

## 思考ツールを活用した古典探究の授業実践

田中 優子

古典教育の意義をどこに見出すか、生徒が興味を持って取り組める古典の授業とはどのようなものか。これは古典教育に取り組む教員が常に向き合うべき課題である。本稿では、その取り組みの一端として、思考ツールを用いたアクティブラーニングの実践について紹介する。

キー・ワード：古典探究 うつくしきもの 思考ツール アクティブラーニング

### 1 問題と目的

古典を教えていると、「なぜ古典を学ばなければならないのか」という生徒の疑問に常に向き合わなければならない。理系の生徒は古典を大学受験で必要としない場合が多いため、最初から古典学習へのモチベーションが低いこともある。そんな中で、古典学習の意義を生徒に説いても、実感として腑に落ちることはあまり期待できない。しかし、古典の授業が生徒の興味を引く内容であり、その活動から得るものがあるという実感を生徒が持てれば、古典学習の意義に関係なく、生徒は古典の授業に積極的に取り組むのではないか。

古典教育については、生徒の「古典嫌い」についての言及（石塚 2007）や、1900年代から既に古典教育に意義が見出せないという古典教育批判があったこと（浅田 1992）等、難しさが指摘されてきた。石塚（2007）は、「われわれが今、最も恐れるべきことは、古典の継承によりもたらされてきた『文化資本』の蓄積そのものが消滅しかねない現状であろう。」と述べている。そのような状況を打開すべく、古典を学ぶ意義を生徒自身が見出すための実践も見られる。例えば、大澤（2021）では、授業での学びを通して学習者自身に古典を学ぶ意義について考えさせている。様々な活動に取り組み、作品と向き合うことで、学習者が古典作品から得るものについて深く考えた様子が報告されている。北海道札幌北高等学校（2017）の実践では、古文に親しみ、進んで面白さを楽しもうとする態度を身につけ、書き手の意図を捉えることを目標の1つとして授業実践を行っている。

聴覚特別支援学校である本校でも、普通校と同様に古典離れの傾向は見られる。特別支援学校である本校は1学年の人数が3クラスで24人程度で、1、2年生では言語文化と古典探究の授業で古典を学ぶが、3年生は文系の生徒のみが選択科目で古典を履修する。場合によっては、大学入試で古典を使う生徒が3、4人しかいない年もある。それでも、共通テストで古典が必修となる国公立大学が多い以上、生徒の選択肢を狭めないように、できるだけ1年生の言語文化と2年生の古典探究の授業で古典の力をつけたい。そのためには古典への理解を深める必要があり、生徒が古典、そして、古典で扱われる人々とのつながりを感じるような授業を行いたい。本稿では、現代に生きる生徒達に「自分ならどうか」と考えさせることで、昔の人々の考え方との違いとつながりを実感させることをねらいとした実践を紹介する。自分の身に置き換えて作品と同じテーマについて考えることで、古典の作品の世界を自分の手元に引き寄せ、生徒が古典の世界を身近に感じ、理解を深められるようにすることが実践の目的である。現代語訳を読んだだけではわからない当時の感覚を想像しながら、実感を得ることで、昔と今のつながりを感じさせたい。また、思考ツールを使って生徒達の考えをまとめさせることで、思考を整理し、視覚的にも生徒達に印象づけることをねらう。

アクティブラーニングについては、小針（2018）では「〈アクティブラーニング〉に対する子どもたちの学習意欲には、家庭環境や基礎学力が前提条件になっている」と指摘されているが、古典の授業にお

いては、生徒の基礎学力が低いと、扱う単元の内容理解（文法的理解と口語訳を含む）がなおざりになることが懸念される。本実践の対象となるクラスは、1年生の間に文法の基礎を学習し、古典単語を辞書で調べて自分で口語訳を考えてノートに書いてくことも習慣づけてある。定期試験のたびにノートの評価を点数に反映させることで生徒達の学習意欲を維持することができた。その上での活動であるので、活動の効果が期待できると考えた。石塚（2007）では、「生徒たちに毛嫌いされている古典が、じつは我が国の大切な国民資産の一つとして活用できることを認識させる必要がある」とし、「古典を現実社会と切り結んだ存在として、個々人の独創的な発想に役立てていけるような古典教育を具体的に提言して実践すべきである」と考える。そのためには、人生の糧とか、生きる指針の発見などと大上段に構えずに、自己の日常生活を一瞬立ち止まり『看脚下』させるような古典教育の確実な蓄積が何よりも肝要である」と述べている。アクティブラーニングで特定の教材のみを楽しく扱って生徒の興味を引きつけるだけでは古典教育の蓄積にはつながらない。生徒にとっては楽しくない文法や古典単語などの知識などの基礎力を養いつつ、生徒に古典から得るものがあることへの気づきや実感を持たせることが望ましいと考える。古典の世界が現在と全く無関係なものではなく、日本人の文化の中でつながっていることを感じることで、古典の学びに生徒自身で意義を見出してほしい。本実践は、そのための1つの取り組みである。

## 2 授業実践

### (1) 方法

2023年9月、2学期の古典探究の授業で実践を行った。対象クラスは高2の上位クラスである（本校は学習の習熟度別に3つのクラスに分けて授業を行っている）。男子3名、女子8名、合計11名のクラスである。課題に熱心に取り組む、非常に真面目で意欲的な生徒が多いクラスである。

本実践では、『枕草子』の「うつくしきもの」と

いう題材を扱った。作者の清少納言が「うつくし」（現代で言う「かわいらしい」）と感じるものを次々と挙げていく、いわゆる「ものづくり」の章段の1つである。授業は次のような流れで行った。

①予習として、『枕草子』と清少納言について副教材の便覧の内容をまとめさせ、清少納言と中宮定子周辺の間関係について調べさせる。

↓

②原文黙読後、現代語訳を配布して読ませる。

↓

③ブレインストーミングとKJ法についての資料を配布し、やり方とルールを説明する。その後、4人、4人、3人のグループに分け、自分達が「かわいらしい」と思うものを付箋に思いっただけ全て書かせる。

↓

④関連する内容ごとに付箋をまとめさせ、分けたそれぞれの付箋群にテーマ名をつけさせる。

↓

⑤それらの付箋群の関係を Fig.1 のように矢印や線で示させる。

↓

⑥完成した図を見ながら、自分達がどういうものを「かわいらしい」と思うのか、共通する要素を導き出させ、それをクラゲチャートの頭の部分に記入させ、その理由を複数に分類してクラゲの足の部分に記入させる（それに先立ち、清少納言の場合はどうなのかを生徒に考えさせ、スライドに映したクラゲチャートを見ながら、全員で一緒に Fig.2 のように清少納言のクラゲチャートを作る）。例として、Fig.1 から生徒達が作ったクラゲチャートを Fig.3 に示す。

↓

⑦各自で自分の「うつくしきもの」を清少納言を真似て書いて提出させる（宿題 評価対象とすることを伝えた）。

↓

⑧今と昔の「うつくし」の違いについて考える。

↓

⑨最後に改めて「うつくしきもの」を精読する。

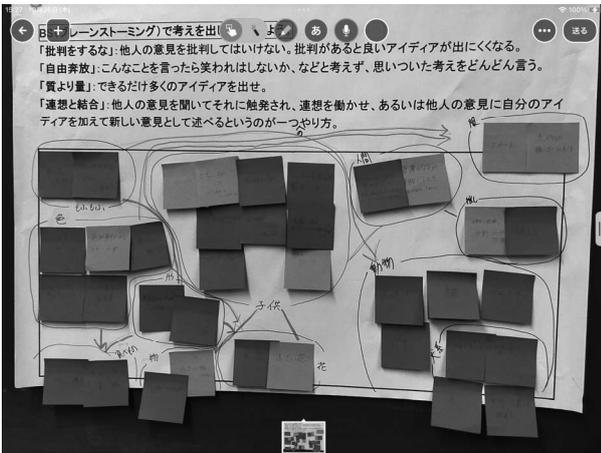


Fig. 1 KJ法で生徒達が作った図

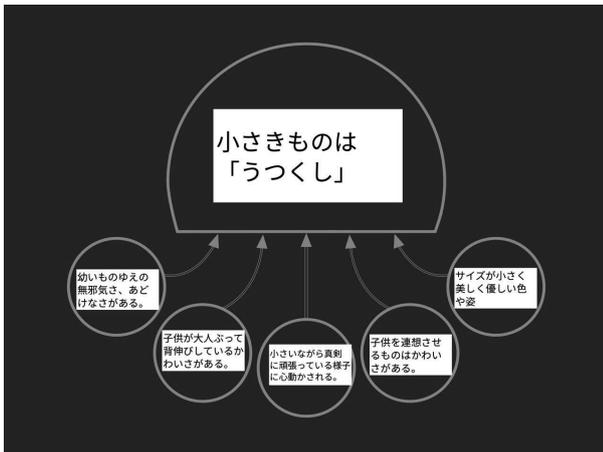


Fig. 2 清少納言の「うつくしきもの」クラゲチャート



Fig. 3 生徒達が作った「うつくしきもの」クラゲチャート

## (2) 授業の様子

まず、上記③のブレインストーミングでは、思いついたことをどんどん楽しんで出していたのが、④～⑥のKJ法での分析作業で、分類しやすいものとしにくいものがあることに気づき、どうまとめるか悩みながらも活発に意見交換をしている姿が見られた。この活動の目的は「うつくしきもの」への理解を深めることであるので、まとめ方に多少おかしいところがあっても、細かいことは注意せず、生徒が理解を深める過程を見守った。

清少納言の「うつくしきもの」のクラゲチャート(Fig. 2)では、「小さきものはうつくし」とまとめ、その理由(クラゲの足の部分)として以下の5つが挙げられた。

- ・幼いものゆえの無邪気さ、あどけなさがある。
- ・子どもが大人ぶって背伸びしているかわいさがある。
- ・小さいながら真剣に頑張っている様子に心動かされる。
- ・子どもを連想させるものはかわいさがある。
- ・サイズが小さく美しく優しい色や姿(はかわいらしい)。

これらは本文の内容に基づいたもので、教員が生徒の意見を聞きながらまとめた。それに対して生徒達のクラゲチャートはどうだったか、まずFig. 3を見てみると、「小さく柔らかいものはかわいい」とまとめ、その理由として次の4つを挙げている。

- ・柔らかいものは、見ているだけで、触りたいと思ってしまうから。
- ・自分よりも小さいものを見ると守ってあげたくなるから。
- ・目の保養になるから。
- ・触感が癒しになるから。

このグループはKJ法でまとめた図(Fig. 1)の上位に「もふもふ」と書いていたので、柔らかいものに目を向けているのがわかる。Fig. 1では「大きい犬」や「押し(のアイドル)」、「パステルカラー」など、「小さくて柔らかいもの」に分類できないものもあるが、クラゲチャートにまとめ直すときには、

ある程度取捨選択をしたようである。また、小さいものと柔らかいものが別々の場合もあることに気づいたようである。そうなるとまとめ方は「小さいものや柔らかいものはかわいい」となるように思うが、Fig. 1の付箋を見ると、「子供」という分類の中に「赤ちゃんのほっぺ」とあり、「食べ物」という分類には「フレンチトースト」があるなど、柔らかさを意識したものが見られるので、まとめ方は「小さくて柔らかいもの」になったのかもしれない。いずれにせよ、「小さい」に「柔らかい」という要素が加わった点が『枕草子』との相違点であり、視覚だけではなく触覚でかわいらしさを感じ、気づきがあった点が興味深い。

他にも、「普段とは違う面を見せる人」や「コワモテな人が笑った時」など、「ギャップ」にかわいらしさを認めているグループもあった。そのグループは最終的にはクラゲチャートで「人やものもっている個性は人によってなんでもかわいい物になりうる」というまとめ方をしていた。

上記⑦の「自分のうつくしきもの」を書くという課題では、グループの考えから個々の考えに戻って、各自で自由に自分がかわいらしいと思うものについて述べていた。どれもよく書けていたが、1つ例を示す。

かわいらしいもの。子猫の寝顔。寝姿。ゴロゴロと喉を鳴らしてすりよってくる様子。短足の猫がテーブルからソファに乗り移ろうとして落ちてしまう、そんなドジな一面もかわいらしい。

色とりどりの文具、アクセサリ。特にパステルカラーなどの優しい色合いはかわいらしい。最近流行しているくすみカラーもまた、落ち着きがあってかわいらしい。ピンクのアクセサリ。うさぎのしっぽ。猫の肉球。なんでも全て小さくて柔らかいものはみんなかわいらしい。

お店にある服にデザインされている、筆記体の英文字、袖がヒラヒラしたトップス、裾の広いズボン、デニムのワンピース。どれもこれも

かわいらしい。背の低い子がオーバーサイズな服を着ているのもまた、かわいらしい。

ミニチュアなどの通常よりも小さいものもかわいらしい。そのテーブルに食べ物をのせて人形遊びをしている子供や、ミニチュアで料理をしている大人もかわいらしい。また、職場での新人が慣れていないような手つきで目をキラキラさせながら一生懸命働いている様子も初々しくてかわいらしい。

いつも笑顔を絶やさない人。完璧そうに見えて実はそうじゃない人。緊張で恥ずかしそうな人。そんな一面をもつ全ての人がかわいらしい。

Fig. 4 生徒の「うつくしきもの」

感性豊かで、たいへん生き生きとした文章である。この文章を読むと、「小さくて柔らかいもの」には色彩も含まれているようであることがわかる。そうなるとこの生徒が考えた「柔らかさ」には触感だけではなく、見た目で感じる柔らかさも含まれているということになる。そうやってまとめておいてから、まとめきれなかったことをその後の段落で述べている。職場の新人の様子については、テレビなどで見たことから書いたようである。そこから最終段落では人間のかわいらしい「一面」についての展開が見られる。このように、どの生徒もこの「自分の『うつくしきもの』」はそれぞれの感性が表れた文章を綴っていた。「流行りのスイーツを見かけると、思わず手に取ってじっと見詰めた衝動に駆られる」と書いた生徒は、「かわいいものを手に入れたくなるのは昔も今も同じなのだろうか」と文章を結んでいた。また、精読時に、「うつくしきもの」の最後に出てくる「瑠璃の壺」については、ただきれいでかわいらしい、というだけではなく、中宮定子と清少納言だけにわかるエピソードがあるのかもしれない、という想像を教員が述べたところ、あえて自分と一部のクラスメイトしかわからないエピソードに関わる物を、別に解説を添えて「うつくしきもの」として挙げた生徒もいた。

各生徒が書いた文章は、生徒が持っているタブレット端末のアプリで共有して読めるようにした。生徒達は他の生徒の文章も読み、楽しんでいる様子が見られた。

最後に⑧で改めて「うつくしきもの」を精読し、文法事項を確認しつつ、清少納言が何をどうかわいらしいと感じたのかを確認した。

### (3) 評価

2(1)⑦の「自分の『うつくしきもの』」は全体に良く書けていた。評価は課題ごとに10段階で評価する。予め課題点30、定期試験70などと配分を決めておき、課題の数によって課題点を30点満点に換算する。

本実践の「うつくしきもの」の評価は「自分の『うつくしきもの』」と生徒がまとめたノート、そして定期試験で行った。生徒同士の話し合い活動や思考ツールを使ったまとめは、すべて「自分の『うつくしきもの』」を書くための過程と捉える。生徒の活動の様子やグループの成果物は客観的で公平な評価をするのが難しいため、評価対象は各生徒の書いた「自分の『うつくしきもの』」とすることを最初に生徒に告げ、その上での活動とした。

その後、今と昔の「うつくし」(かわいらしい)と感じるものの共通点と相違点について考えさせたところ、次のような意見が出た。

- a. 小さいものや子ども、小動物が可愛い、という点は今も昔も共通している。
- b. 今はかわいさに対して様々な視点があるが、昔は画一化されていたのではないか。
- c. 今は人工的にかわいさを作ることができるが、昔はありのままの姿にかわいさを見出した。
- d. 今は外見だけではなく内面を見てかわいと感じることもあるが、昔は主に外見で判断したのではないか。
- e. 背伸びしている姿や頑張る姿など、今は具体的な姿ではなくても、日常的な姿勢など、見えないものにもかわいさを感じる。昔はどうだったのか。

dとeに関しては、古文では心理描写が少ないため、文章を読んだだけではわからないことも多いが、昔の人々も感情があったのだから、今と共通する面もあったはずであり、昔の人々の心に思いを馳せながら読むことで、古典の世界が生き生きと身近に感じられる。今と昔で文化の違いはあっても、同じ人間で同じ日本人なので、当時の感覚を知識で補いつつ想像し、時間を超えてつながることができる。授業ではそのように説明した。

### 3 考察

本実践は、学習指導要領の「古典探究」の目標のうち、(2)の「論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。」に合致するものである。この目標は1年生の科目である言語文化とも共通しているが、2年生は1年生の授業で学んだ古典の知識があるため、より正確に深く作品の内容を読み取ることができ、活動にも余裕を持って取り組むことができると考えられる。アクティブラーニングはやみくもにすればよいものではなく、基礎学力を伸ばしつつ、効果的に取り入れられるのが理想的である。その意味でも、1年生の間に古典の基礎を学んだ上で取り組んだ今回の活動は、生徒達が活動を楽しみながら理解を深める一助になり得たと考えられる。

ブレインストーミングとKJ法は授業の手法としてよく例を目にするものだが、今回はその結果を思考ツールにまとめ直すことで、生徒達に更に一歩進んだ思考を促した。上記2で示した例のように、『枕草子』で「小さきもの」がかわいらしいとまとめられたのに対して、「小さく柔らかいもの」とまとめる中で、サイズの大小だけでなく、触ったときの柔らかさや、色彩の柔らかさに注目し、また、そこから今と昔の相違点として、今は内面にもかわいらしさを見出すことや、様々な視点で、画一化されないかわいらしさを見出しているということへの気づきが

あった。そうやって、実感を伴う思考の中で、古典の作品の世界がより具体的に身近に感じられたのではないかと推測される。

#### 4 まとめ

古典の作品全てにアクティブラーニングを取り入れるべきかと問われたら、そうは思わないと答える。なぜならば、物語性の強い作品や、落ちがわかりやすい作品は、作品そのものの持つ魅力だけでも十分に読者を引き付けられるはずだからである。しかし、そのためにはある程度の基礎力が前提となるので、基礎的な文法力や語彙力は養いたい。

本実践で扱った「うつくしきもの」は『枕草子』の「ものづくし」の章段の1つであり、作者の感性のままに具体例が挙げられていくだけの内容であるため、生徒からすると面白味を感じるの難しいかもしれない。口語訳を読んでも、感想は「そうなのか」で終わってしまいそうである。そのような章段だからこそ、アクティブラーニングの意味があると考え。活動の最後に自分の「うつくしきもの」を書くことを生徒に課したが、その際には清少納言の真似をするということで、生徒達がじっくりと「うつくしきもの」を読み返し、書き方を検討していた。そのように、活動のための資料として古典の文章を読み込むことで、生徒達の理解もより深まったと考えられる。そのため、活動後に行った精読は非常にスムーズに行うことができた。

古典のどの教材でも効果的なアクティブラーニングを思いつくのは難しいし、その必要もないと考えるが、本実践で扱った「ものづくし」のように、生徒が取っつきにくいと感じるような作品ほど、活動を工夫する意味があるのではないかと考える。また、心理描写の少ない古典だからこそ、作品の世界を想像し、身近に感じられるような仕掛けが求められる。生徒達の理解を深められるような活動を今後も模索していきたい。

#### 〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

#### 〔参考文献〕

- 浅田 孝紀(1992)  
古典教育の意義に関する一考察. 日本語と日本文学 17, 1-10.
- 大澤 由紀(2021)  
学ぶ意義を見いだす古典学習指導—「学びに向かう力・人間性等」を育成するために—. 千葉大学教育学部附属中学校研究紀要 51, 1-8.
- 北海道札幌北高等学校(2017)  
アクティブ・ラーニング授業実践事例. 独立行政法人教職員支援機構.  
<https://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/jirei168.html> (閲覧日: 2023年12月22日).

#### 〔引用文献〕

- 石塚 修(2007)  
これからの日本社会で古典教育が果たす役割はどうあるべきか—「文化資本」の概念を用いて—. 人文科教育研究 34, 75-86.
- 小針 誠(2018)  
アクティブラーニング 学校教育の理想と現実 講談社現代新書.
- 文部科学省(2019)  
高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編.